

社報 御霊本宮

第89号

発行者
御霊神社本宮
宮司 藤井利夫
五條市霊安寺町
0747-23-0178

発行日
令和3年
11月1日

神からの贈り物

秋を代表する味覚の一つに「柿」が

あります。二〇一四年の総務省統計局の資料によれば、沖縄県を除くほとんどの都道府県で収穫されています。鎌倉時代、世界最古の完全甘柿が発見されたのも日本だといわれています。

その柿の生産量が市町村単位では日本一を誇るのが五條市です。「日本一」の称号は生産量だけからくるものではありません。食べると「おいしくて柿の概念が変わった」と驚く人もいるほど、味や食感に優れています。私の姪の子は他県に住んでいます。その地域の柿は食べないのですが、五條の柿はおいしいと言って食



べています。

柿の学名は「Diospyros Kaki」です。

Dios とは「神の」「神聖な」、pyros は「与えられる物」という意味です。よって Diospyros は「神から与えられた食べ物」という意味になります

「柿が赤くなると医者が青くなる」と言われるほどに滋養豊かな果物です。実だけではなく、葉にも殺菌作用、抗酸化作用など、様々な効能、作用があり、昔からお茶や、寿司（柿の葉寿司）などに利用されてきました。

美味しい上に栄養価に富んだ「柿」は、まさに神からの恵みの食べ物なのです。

明石市の柿本社の御神木、筆柿の縁由には「昔

此ノ神持統文武ノ朝ニ仕へ給ヒシ時石見ノ國ヨリ都へ通ハセノ路次必ズ此處ニ立寄ラセ地ノ風景ヲ愛シ給ヒ、

或年我が園ニ結ビタル草柿ノ實ヲ一

ツココニ残シ我が敷島ノ道ト共ニ栄

エヨト曰ヒシニ、果セルカナ芽ヲ生ジ

発葉シテ今ニ繁茂シテ年々實ヲ結ベ

リ。然ルニ此ノ實口ニ含メバ歯ノ痛ミ

タチ處ニ止ミ、マタ子ヲハラメル婦人

此ノ實ヲ懐中スレバ難産ノウレヒ無

シトテ、乞フ人ノマニマニコレヲ授ケ

ヌ」と伝わっています。筆柿とはその

実が筆の穂先に似ている不完全甘柿

のことで、一本の木に甘い柿と渋い柿

がなるといいます。

山口県では、疫病防除を祈願する氏

子講でみられる特異な祭祀形式に、柿

の実・柿の実に模した握り飯・柿の葉

に盛った赤飯など、柿にちなむ供物風

習が残っています。柿は、民間療法に

頼らざるを得なかった近代までは疫

宇智郡 狛犬めぐり

霊安寺町 日吉神社



大正三年（一九一四）に奉納されています。像高は二十三cmと小さな狛犬です。

尾は団扇型ですが、中央の尾の先が他の尾の先に比べてとても大きいものになっています。

阿形は、歌舞伎役者が見得を切っているような顔をしており、思わず笑ってしまう可愛い狛犬です。これは変顔ではなくて、邪悪なものを防ぐために

睨み付け威嚇している顔なのです。



神楽月

陰暦十一月の異称はいかにも冬らしい呼び名です。新暦の十二月にあたり、この月になると霜が降りるようになることから「霜降月」といったのが、「霜月」に転じたといわれています。

「霜月」以外にもこの月の異称は多く、「神帰月」「神楽月」「雪待月」などともいわれます。



出雲神楽

「神帰月」は、陰暦十月（神無月）に出雲大社に集まった神々が、この月になるともとの国へ帰り来ることからだといえます。

「神楽月」は、この月には稲の収穫を祝うなどして、神楽を奏することが多いためといわれます。

知らず来て 四方の宮居の 神楽月

立つ 榊葉の 音のさやけき

（何も知らずにやってきたが、あちこの神社では神楽月であるからか、立てられた榊の葉が風に揺れてさやけきと音を立てている）

室町時代の歌学書「蔵玉和歌集」に収録されている藤原定家の作とされる和歌です。

「雪待月」は、冬支度を済ませて雪が降るのを待つ気候の月という意味です。最近では温暖化で十二月になっても降雪や積雪があまりありませんが、季節感のある呼び名です。ほかに「肥冬」や「氷壮」といった冬を思わせる呼び名もあります。

五條文化博物館秋季企画展

神を守る狛犬たち

神社の本殿内に安置されている木造狛犬は、地域の氏子さんですら見たことのないものです。その狛犬が二十三体、初公開されています。

ほかに、狛犬の特徴などについてパネル展示しています。また、狛犬総選挙も行われています。気に入った狛犬に一票を投じてください。

期間 十一月十四日（日）まで
入館料 一般三〇〇円



御霊神社本宮の木造狛犬（室町時代）

八百万の神々

足名椎神・手名椎神

日本書紀では脚摩乳・手摩乳と表記しています。記紀に登場する夫婦神で、足名椎神は男神、手名椎神は女神です。出雲の斐伊川の川上に住む老夫婦として登場します。娘の奇稲田姫が八岐大蛇に食べられるところを素戔嗚尊に救われ、新たに造営された宮の管理に当たるとともに、稲田宮主神の名を与えられています。

神名の由来には諸説あります。そのうちの一つには、「ナヅ」は「撫づ（撫でる）」、「チ」は精霊の意で、父母が娘の手足を撫でて慈しむ様子を表すとする説があります。

足名椎神、手名椎神を祀る主な神社として、氷川神社（川越市）、手長神社（諏訪市）、足長神社（諏訪市）、広峯神社（姫路市）、須佐神社（出雲市）などがあります。

五條十八景を訪ねて

第七景 「湯川遠村」

湯川は 古より 見名存す
 相望めば 微茫 烟靄昏し
 草樹 千家 時に隠見す
 馬頭先ず 問ふ 杏花の村

湯川は昔から有名な村里である。遠く村里を望むと、かすかにけむる靄の中にうるんでいて草や木々、家々の姿が時々見え隠れしている。私は馬を駆って杏の花の咲く美しい村を訪ねる。

湯川は西吉野町湯川であると思わ



れます。

西吉野村史には、湯川の地名伝説が記されています。

「昔この土地に湯が湧き、湯川の地名がおこった。現在も小字に湯壺という所がある。(湯壺は今は赤松領だが昔は湯川領だった)ところがある時、馬のわらしを洗ってから湧出が止まり、その湯は有馬に飛んでしまった」

いつの頃の伝承かは分かりませんが、当時も有馬温泉が有名であったことが分かり、有馬の湯と同等の湯が湧いていたということでしょう。

湯川には、阿弥陀堂があり、本尊の阿弥陀如来像は丈六(約四・八五m)の木彫座像で、国の重要文化財に指定されています。胎内に墨書があり、嘉応二年(一一七〇)、仏忍仏師の作と判明しています。



阿弥陀堂

秋季例祭を斎行しました

十月二十三

日、二十四日の本社例祭は

天候にも恵まれ、無事に斎行することができました。



新型コロナウイルスの新規感染者数が極端に減ったこともあり、昨年以上の参列者を得て斎行されました。とはいえ、神社役員等の関係者のみの参列であり、神輿も出さない祭りとなりました。



まさかの

全世界のオリックスバファローズファンの皆さん、優勝おめでとうござります。

いやあ、万年Bクラスのチームがやってくれました。毎年、優勝するぞと言いつつ、今年も無理やるなあという、ファンにも負け癖がついていた二十五年間だったのかもしれませんが。

リーグ優勝は悲願でしたが、それで終わっては、また何年間か待つことになるかもしれません。ここは一気に日本一をめざしましょう。クライマックスを勝ち上がって、日本シリーズではヤクルトに勝ちましょう。

セリーグの日本シリーズ進出チームはまだ決まっていませんが、前年最下位チーム同士の日本一決定戦は話題になりますよ。でも岡本選手がいる巨人とも対戦したいし、阪神との関西ダービーも見てみたい！

Instagram @goryohongu



Twitter @goryohongu



#御霊本宮 #goryohongu を付けて投稿してください。

公式ホームページ

<http://goryojinja.or.jp>

日本書紀にみる

十二代景行天皇(六)

十六日に阿蘇国あそくにに着きました。その国は野が広く遠くまで続き、人家が見えませんでした。

天皇は、「この国には人がいるのか」と問いました。そのとき、二人の神である阿蘇津彦あそつひこと阿蘇津媛あそつひめが、たちまち人の姿になり、やって来て言いました。「私たち二人がおります。どうして人がいないことがありましようか」それでその国を名づけて阿蘇あそといいます。

秋七月四日、筑紫後国しゆのくにの三毛みけ(福岡県三池)に着いて、高田の行宮かりみやに入りました。時に倒れた樹木があり、長さ九百七十丈。役人たちは皆、その樹を踏んで往来しました。

当時の人は「消えやすい朝霜の置いている御木の小橋を渡って、群臣たちは宮仕えに行くことだ。」と歌に詠みしました。

天皇は、これは何の樹かと尋ねました。一人の老人が言いました。「これは歴木くぬぎ(様)と言います。以前、まだ倒れていなかったときは、朝日の光に照らされて、杵島山きしまのやまを隠すほどでした。夕日の光に照らされると、阿蘇山を隠すほどでした」

天皇は、「この樹は神木である。この国を御木国みけのくにと呼ぼう」と言いました。

七日、八女国やめのあがた(福岡県八女)に着きました。藤山を越え、南方の粟崎あわのさきを望みました。「その山の峯は、幾重も重なって大変麗しい。きつと神は、その山におられるのだらう」と言いました。

時に、水沼県主みづまのあがたま猿大海さるおほみが言うに、「女神がおられます。名を八女津媛やめつひめといいます。常に山の中においでです」それで、八女国やめのくにの名はこれから始まりました。

八月、的邑いづくはのむら(福岡県浮羽)に着いて食事をしました。

この日、食膳掛うきが盞さき(酒杯)を忘れました。当時の人は、その盞さきを忘れた

ところを名づけて浮羽うきはといいました。現在、「的いづく」というのは、それが訛つたものです。かつて筑紫の人々は、盞うきを浮羽うきはといいました。

十九年秋九月二十日、天皇は日向ひむかから大和に帰りました。

二十年春二月四日、五百野皇女いおのひめみこを遣わして、天照大神を祭らせました。

二十五年春二月十二日、天皇は武内宿禰すくねを遣わし、北陸と東方の諸国の地形、あるいは人民の有様を視察させました。

二十七年春二月十二日、武内宿禰は東国から帰って天皇に「東国の田舎の中に、日高見国ひたかみのくにがあります。その国の人、男も女も髪を椎のような形に結い、体に入墨えみしをしていて勇敢です。これらすべて蝦夷えみしといえます。また土地は肥えていて広大です。攻略するとよいでしょう」と言いました。

秋八月、熊襲くまそがまた背いて、辺境をしきりに侵しました。

(次号につづく)

すすき(ススキ)

婦負めいの野のの薄すすきおしなべ降る雪ゆきに
屋戸やど借る今日きょうし 悲かなしく思おもほゆ

高市黒人たけちのくろひと(十七ー四〇一六)



「婦負の野の薄を押し倒すばかりに、降り積もる雪の中で宿を借りる今日は、ひとしお悲しく感じられる。」

大伴家持みくにのいが、三国五百国みくにのいから聞き書きした高市黒人の歌です。高市黒人は、家持より、四、五十年前に活躍した人物で、「旅の歌人」と称され、旅先で旅愁を漂わせる歌を多く作りました。

黒人が越中の婦負郡を通過する時にひどい降雪に遭遇したのでしょうか、なぜ婦負郡を通ったのかは分かっていません。また、三国五百国みくにのいのような人物かは不明で、家持がこの歌をどこで聞いたのかも不明です。